

## 下町ロケット

もう5～6年、あるいはもっとになるか、娘が「これ、ハイ。買うといてゆうたやろ。」「へっ」記憶になかったので、少し驚いた。だから、本棚に積んだまま置いてあった。しかしながら「読書は邂逅である。」いつ読むかもしれない、ということで、2巻目のガウディ編、3巻目のゴースト編も買ってあった。(これももう覚えないのだが。) このとき、TVドラマで随分人気があるらしく、4巻目のヤタガラス編を買うときには、ちょっとした騒ぎだった。……無論、ドラマは脚色がなされている。……で、今では時々読み返している。

友人たちに尋ねたら、全員が知っていて、もっと驚いた。

佃航平が主人公で、もとJAXAの一員だったのだが、打ち上げに失敗した責を負って辞任し、父親の経営していた中小企業の社長になった。金繰りやら社員との軋轢など、どこにでもある話がでてくるが、ロケットへの執念は一貫して抱き続けていた。で、その時点で世界最高のバルブ（エンジンの一部品）を開発し、この特許をめぐる、日本を代表する巨大企業との虚々実々の駆け引きがはじまるのだが、先行特許が常に有利に働く。巨大企業は、これを、そのとき、いわれなき訴訟の費用を餌に自分のものにしてしまおうとする。いわば何でも欲しがると子供のようなものだが、ここでの粘り腰がものをいい、紆余曲折があるが、ロケットのエンジンの一翼を担うことになる。大企業病とでもいうべき傲慢さが随所にでてくるが、つねにカウンターパンチを浴びせてその技術レベルの高さを維持し、妥協しないところが魅力である。見方によっては、頑固でもある。

2巻目は、心臓の人工弁の話で、部下のアイデアをとりあげる教授（上司）との抗争である。やはり、開発費が問題となるが、それも、ロケットの時に特許権を奪いに来た部長財前道生と意気投合することによって、解決に至る。財前は、佃の技術の高さに対する矜持と惻隠の情溢れる高潔な人格に惹かれ、佃の応援者になっていく。……ボクとしては、身近にみてきたものが主題になっていることから、この部分がもっともよく理解できた。……当初は医師としてもすぐれていたものが、どこかの教授になれそう、だとか、もっと偉いさんになれそうな状況になったら、なりふり構わない点は、まったくその通りである。結局なれなかったのだが、普通の神経の人間なら、憑き物がおちたようになるのだが、まったく懲りないのがいて、皮肉は通じないし、他人の業績をいつのまにか、勝手に自分が発見したかのように利用している。こりゃ、ダメだ、と思ったものである。

3 巻目は、特許をめぐる訴訟の話で、佃の献身的な援助にわずかに礼をのべただけで、他の企業との合併にいたる話である。……そして、その「人として許されない行為」が、4 巻目に露骨に結果として現れる。天罰観面である。NASA もでてくるが、当然敵役で、他社のアイデアを盗んで、データをでっちあげ、……とよくある話。この時にも財前は、出資することを会社に認めさせる。

4 巻目がこの物語のクライマックスになるのだろうが、ロケットから人工弁、さらに高齢化し、成り手がなくなる可能性がある日本の農業の抜本的な改革に手を染めることになる。ヤタガラスとは、準天頂ロケットで、GPS に利用でき、誤差 3 cm で無人農機具の開発に挑む気宇壮大なものである。

いずれも、巨大企業の財前部長の協力やそれを援助する佃らの活躍を描いたもので、ロケットの時にみせた中小企業の矜持が伏線になっている。

この物語全体を通じての主題は、佃は単に技術の高さを自慢するのではなく、誰のための天与の才能か、ということに常に考えていることである。競争相手に対する態度にしても、それを包含してしまうような傑物である。

この時も、3 巻目で裏切りに会ったグループに手を差し伸べる。なぜなら、「われわれの目的は、高齢化して離農する農家を援助し、若い人を経済的にも援助できるためのものである。」という姿勢を貫いている。……このあたり感動ものです。

ヤタガラス（八咫鳥）とは、東征を決意した神日本磐余彦命（カムヤマトイワレヒコノミコト）の道案内として、険阻な熊野越えを助けるために天照大神（アマテラスオオミカミ）が差し向けた「神の遣い」であり、3 本脚のカラスで、瑞兆とされ、3 本脚は、それぞれ天、地、人を現わす。神日本磐余彦命は、大和を平定し、神武天皇と名を改めて初代天皇になった。

日本サッカー協会のシンボルマークになっている。

ボクは、50 年以上前に読んだ子母澤寛氏の「からす組」を思い出した。

（からす組・鴉組）については別稿で書きます。）

下町ロケットは、いまでも、戒めを込めて、時々部分的に読みかえしています。

2019.01.22.